

---

# マリアの魔法

伏見

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリアの魔法

### 【Nコード】

N5549Y

### 【作者名】

伏見

### 【あらすじ】

貧乏だった桜庭毬は、事故に遭い、はやすぎる死を迎えそのまま天国にいくはずだった。目を開いてみると…そこは異世界で

そこで毬が出会ったやさしい貴族の老夫婦に拾われ、新しい環境で穏やかに過ごした。彼女が元から持っていた音楽の才能を益々伸ばしていき、勤勉な態度で薬草学を学び続けた。ある日、国の城から一通の手紙が届き

## 第一話 毬

最後の記憶は眩しさで思わず目を瞑るほどの明るいライトと目と鼻の先にあるトラックだった。

考えなくてもわかる。私は死ぬんだ。

私、桜庭毬。高校二年生の16歳。

普通の人生だったと思う。家が超がつく程の貧乏だということ以外は。

両親はとて私によくしてくれたし、私はそれに応えるために頑張ってきた。奨学金のために学校の成績はいつも首席を譲らなかったし運動もできた。

父が起業で失敗し、莫大な借金をつくってしまい、超貧乏になった。制服も高校になんとか説明し、中学生のときの制服を今でも着ている。

特に貧乏について不満もなかった。そんなことよりもさつさといい大学に入学して卒業し、早くいい職に就いて両親を助けたかった。父はよく「毬の好きなことをすればいい。なにも無理することはない。だから、甘えていい。欲しい物があれば欲しいといえればいい」といった。母は「毬、あなただけの道を進めばいいの。あなたの為ならどんなことだってしてあげられる」と優しくしてくれた。でも私は小さい頃から自分の家が貧乏なことをしていた、だから簡単にあれがほしいこれがほしいとはいわなくなっていた。

でも、本当は音楽を習い続けたかった。

## 第二話 天使の迎えは

音楽は好き。

歌を歌うのも、楽器で音を奏でるのも。

けどそれができたのは小学生まで。中学生から家庭がかなり危うかった。

(……)

(……ん……)

徐々に目がさめてきた。

横たわっていたらしい体を立たせる。

「……どこどこ？」

わずかな月明かりだけを頼りに、目を凝らしてみる。

目の前には月が映った湖と無数に生えている木々だけしかない。

たしか私は……トラックに引かれて死んだはず……

学校が休みだったからラフなワンピース一枚とカーディガンを着て、図書館にいつて、帰りに、トラックに…………。

あー私きつと今天国にいるんだ。

天使の迎えは、ないのかな？…

「…………ふえつくちっ」

少し寒いなあ。

立ち上がり、周りを見回してみる。

天使様は道にでも迷ってるのかなあ…たしかに森は深そうだし

…………

そのとき、ふと思いついた。

歌おうかな。

歌えばきつと私がここにいとわかるし、それに…私も久しぶりに伸び伸び歌いたい…………！

歌おう。歌うなら魂を誘う歌にしよう！

### 第三話 トラクの森にて

俺は今報告のあったトラクの森にいる。

デイルに俺自身が行くことに反対されたが、こういうことは自分で見ることが大事だ。

というより、体が勝手に動いていた。のほろが正しい。

部下の報告を聞いた瞬間、デイルの言葉を最後まで聞かないまま、移転の魔法を使っていた。

月明かりだけを頼りに、トラクの暗い森を進む。

部下の報告によると、地図のトラクの森の中心にピタリと魔法針が反応したそう。

魔法針は、とくに巨大な魔力に反応し、そこを指差す。

(……湖、か。)

トラクの森の中心には湖がある。

そこに巨大な魔力の正体があるようだ。

一体だれがこんな巨大な魔力を生み出せるのだろうか。

……いったい何のためにこんな魔力を使って一体どんな魔法を行使したのか……。

……もしかこのリーフ国を脅かすものではないだろうか……。

嫌な考えが頭から離れない。

真っ暗な闇の森をゆつくりと、確かに進んでいく。

このトラクの森には魔獣の一族、白銀の狼ミラ族が住んでいる。  
あんな巨大な魔力を間近で触れると、人間は狂って死に絶えるだろう。それほどの魔力だ。

いくら魔獣といえども、この巨大な魔力の瘴気を近くであてられて、狂っているだろう…。

それが魔法を使ってあたりを明るくしない理由だ。

とにかく、ミラ族を刺激しないように、慎重に進むしかない。

とにかく、周りに気を配りながら歩いていると、風に乗せられてかすかに音が聞こえた。

『……………え

い…』

『

(……………?)

女の声だ。耳を澄ませる。だが、歩みは自然と速くなっていくのを感じた

『わ

…あ

……………』

まるでその声に導いてもらっているかの様に、足が勝手に動く。進むべき道を最初から知っていたかのように。

声は徐々に大きくなる。その声の主に近づいてきたのだろう。

そして、見えた。青白い月明かりに照らされて、黒髪の少女が湖のほとりに立っていた。

少女はゆっくりと息を吸い、凜とした姿勢で月を見上げながら歌っていた。

聞いたこともない、神秘に包まれた言葉で。

『おいで おいで

私はあなたを誘うもの  
あなたは私を導くもの

おいで おいで

私は魂を誘うもの

あなたは魂を導くもの

あなたしか知らない場所

天の果てへ

連れて行ってほしい』

肌寒い空気の中、少女の声だけが空気を震わせ、自分の心でさえも震えていた。

思わず息をのむ。思考が完全に止まった。

青白い月明かりに照らされた少女は、今にも崩れ落ちそうなほど、か弱く繊細なガラス製品を思わせた。

この一枚絵は、どこを探しても存在しなくて、今、確かにここにしかない。

(……きれいだ。)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5549y/>

---

マリアの魔法

2011年11月20日14時03分発行